

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第587号 平成25年8月2日

ゆるキャリ

「ゆるキャリ」という言葉を、ご存知ですか。「ゆるキャラ」ではありませんので、念のため。

この「ゆるキャリ」というのは、自分が大切にしている生活を謳歌しながらマイペースで仕事をする「ゆるやかなキャリアの女性」達の事をいい、バリバリ働く「バリキャリ」の反対語なのですが、これが今、脚光を浴びています。

「ゆるキャリ」という言葉の生みの親は、エッセイストの葉石かおりさんですが、彼女は何故「ゆるキャリ」の道を選択する事になったのでしょうか。

葉石さんは、大学を卒業すると軽い気持ちでラジオのレポーターという仕事に尽きます。ところが、就職して数ヵ月後には、仕事が気に食わず辞めたくなくなってしまいます。そして、1年たったある日、彼女は衝動に駆られるまま上司に「私、辞めます」と告げると、その上司はあっさりと「そう、わかった」といって席を立ってしまったといえます。

その後、彼女は、雑誌記者としてがむしゃらに働きます。「男なんかには負けるもんか」ととんがっていた事もあって、社内ではジコチュウで愛されない存在だったそうです。

「忙しい」「休んでいない」「寝ていない」は「バリキャリ3大口癖」だそうですが、彼女はそれを自慢の様に吹聴していたといえます。しかし、仕事にのめり込む内に体調を崩し、結局その職場からも去る事になります。

35歳にして無職になってしまった葉石さんは、そこで、重要な事に気付きます。それは、ラジオレポーター時代、上司に退職の話をした際慰留されなかったのは、「私という人間に付加価値がなかったからに過ぎない」という事であり、結局自分は、その最初の転職から何も学んで来なかったという事でした。

もう一つの転機は、父親が68歳という若さで急逝した事でした。葉石さんは、最愛の父の死を通して、「人生は1度しかない」という事、「長いようで短い人生の大半をお金を稼ぐことにだけにとらわれ、男性に負けじと目を吊り上げて仕事をするだけでいいのだろうか？」と思う様になります。

つまり、「お金を稼ぐことだけが人生じゃない」「人生は楽しまなくちゃ意味がない」という訳で、「趣味は仕事」の人生を見直し、「ゆるキャリ」の実践を始める事

にしたのだといいます。

今、葉石さんは、1カ月の半分は東京で仕事をし、半分は京都で私的な時間を満喫するという、これぞ「ゆるキャリ」という生活をしています。そして、そうした生活に憧れ、「ゆるキャリ」を実践している女性が増えています（以上、葉石かおり著「貴方が辞めると言ったとき、上司はとめてくれますか？」から）。

ここで、葉石さんが提唱する「ゆるキャリ10カ条」を紹介しておきましょう。

- 1 今の仕事が心から好き
- 2 周囲との調和を大切にしている
- 3 いつでも「女」を忘れない
- 4 「仕事の閉店時間」がある
- 5 「自分軸」を持っている
- 6 「自分の値段」を決めている
- 7 心を許せるパートナーがいる
- 8 心とカラダをコントロールする術を知っている
- 9 オープンマインド
- 10 社会全体のことも考えている

この10ヶ条を見ていて感じる事が一つあります。それは、「ゆるキャリ」は、自分に甘いだけの「甘キャリ」でも、仕事に対する責任感の薄い「ぬるキャリ」でもないという事です。

葉石さんは、「独りよがりな『バリキャリ』の時代はもう終わり。これからは肩の力をゆるっと抜けた『ゆるキャリ』の幕開けといつつつ、「自分の都合で周囲の人を翻弄しないこと、与えられた仕事はどんな状況でもやり通すこと。当たり前のことですが、いい仕事を長く続けるためには、こうした責任感がモノを言います。」と述べています。

つまり、「ゆるキャリ」というのは、自分の生活を大事にしながらいいい仕事をするという事であり、その為にも「ワークライフバランス」の重要性を理解し、実践できる人の事をいうのだと思います。

葉石さんは、

- ・休みの日は仕事を忘れて思いっきり休む
- ・明日できる仕事は明日に回す
- ・仕事に区切りをつける

という3点をモットーに生活しているそうで、これによって今では、夫婦げんかも殆どなくなったそうです。

かつて、女性の総合職が登場した時、男以上にバリバリ仕事をする女性が持てはやされた事もありました。女性が出世する為には、男と同じように働くのは当たり

前という時代が長く続きました。しかし、男性も女性も仕事、仕事で擦り切れてしまっている状態は、企業にとっても社会にとっても損失であり、決して好ましい事ではありません。

こうした反省から、今、ワークライフバランスが広く推奨されていますが、その意味では、「ゆるキャリ」は時代の先端を行っているといえるでしょう。

これを、女性だけのものしておいて良い筈はありません。女性が男性の様に働く時代から、男性が女性の様に働く時代へと、男性自身の発想の転換が必要になっていると感じています。（塾頭：吉田 洋一）